

道灌山

児玉 寛嗣

西日暮里駅を出て西に向かうと右手に坂道がある。坂を登ったところが道灌山である。山と言っても標高は二十メートルあまりで小高い丘といったところだ。

道灌山の地名の由来は江戸城を築いた太田道灌の出城址だった、鎌倉時代の豪族・関道閑の屋敷址だった、など諸説ある。この辺りは江戸時代、人々が日の暮れるのを忘れて四季おりおりの景色を楽しんだことから、ひぐらしの里とも言われている。小高い丘は北は田端、南は上野辺りまで続いている。

青空文庫のなかに宮本百合子が晩年に書いた「道灌山」というエッセイを見つけた。千駄木の自宅から毎日のように田端駅に汽車を見に行き、道灌山まで足をのばして遊んだという子供の頃の思い出を書いたものである。明治末期のこの辺りの様子が覗えて興味深かった。以下はその一節。

「わたしたちが行く道灌山で見晴らしのきくのは田端側の崖上だけだった。その崖から三河島一帯が低く遠くまで霞んで見わたせた。低いそっちは東で、反対側の西側、うちのある方は見晴らしがきかなくて、お寺になっていた。(中略)道灌山の深い草は、かけまわるにも好都合で気にいっていたのに、こわいことがあって、わたしたち子供は、もう道灌山へは行かなくなってしまう」

読み進むと、草陰から汚い身なりの乞食が姿を現したので慌てて逃げてきたと書いてある。

彼女が辿ったと思われる道を歩いてみた。千駄木方面から坂を登り、田端駅に着いた。眼下に山の手線、京浜東北線のプラットフォーム、その先に伸びる線路が見渡せるところを走っていた蒸気機関車を彼女は飽きもせず眺めたのであろう。線路に沿って上野方向に向かって歩く。ビルが視界を遮っている所が多く三河島方面も建物が見えて込んでいて低く見渡すというわけにはいかない。エッセイによると付近には牛のいる牧場もあったそうである。当時の面影はない。彼女が遊んだ草むらは開成中学・高校に敷地になっている。百余年の間に道灌山も大きな変貌を遂げたとあらためて思った。

